

竹のハンドベル“アンクルン”を用いた 音楽教育への取り組みと有用性

荒 井 弘 高¹

1. はじめに

“アンクルン”はインドネシアの民族楽器であり、一つの楽器で一音のみ奏でることができ、手に持って演奏することから竹のハンドベルと言われている。本学ではソルフェージュの授業において調律されたド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ド、一オクターブ8音の“アンクルン”を用い、リズム・音感教育を柱とした音楽教育の一環として授業に取り入れている。ここでは、インドネシア楽器協会を通して輸入した“アンクルン”の部品を、自分自身で組み立て、音合わせを行い、合奏を行う、までの取り組みを行っているが、この取り組みによって起きる学生の音楽に対する意識の変化は顕著なものがあり、今回その取り組みを紹介すると同時に、その有用性についても述べることにした。

2. アンクルン

“アンクルン”はインドネシアの民族楽器である。筆者とアンクルンとの出会いは、東京、青山にある「子どもの城」(2015年2月閉館)で開催された親子参加型の夏季セミナー「アンクルン」の講座であった。この講座は

¹白鷗大学教育学部
e-mail: aladdin-h@fc.hakuoh.ac.jp

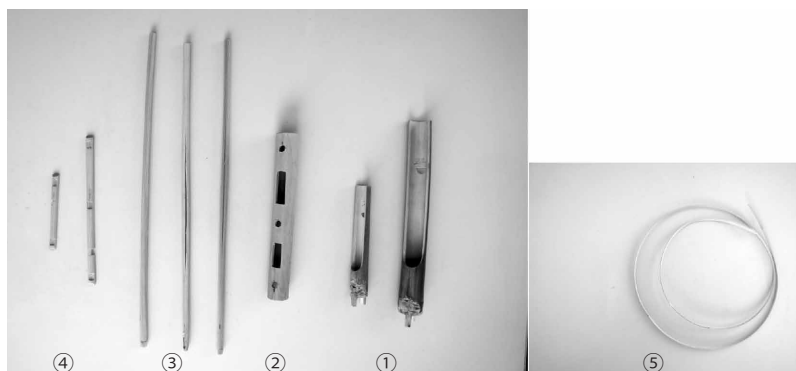
親子連れでないと参加できないとのことで、いやがる当時高校生であった末娘を連れ出し参加したのが“アンクルン”との最初の出会いであった。組み立て、音合わせ、合奏、を行いまた模範演奏などを聞いた半日ほどの講座であったが、“アンクルン”の奏でる音楽の魅力に驚嘆し、同時に音楽教育への計り知れぬ有効性を感じ、すぐさま本学での音楽の基礎を学ぶソルフェージュの授業に取り入れた。

竹の材料のみで作られている“アンクルン”は打楽器として分類され、一つの楽器で一音のみ奏でることができる楽器であるため、演奏を行う際にはその曲の使用する音の数だけ“アンクルン”が必要となる。

インドネシアの竹は、その気候風土により大きく育ち、日本の竹と比べると節と節の間が非常に長く、またその直径もかなり太くなるものもあるようである。そのため、現在ではそれらを利用したガムラン・ジェゴグなど様々なバンブー楽器が作られている。そして、それらのどの楽器からも魅惑的な音色が醸し出され、そのアンサンブルは心を震わされるほどである。また、それらの楽器はすべて手作りであり、職人が一つ一つ丁寧に削りながら音程を合わせ、一つの楽器を完成させている。このこともこの楽器の魅力の一つとなっているのではないだろうか。

当授業では、手作りされ部品の状態で輸入された“アンクルン”を使用している。それは、全体の長さの半分ほどを削り一オクターブで調律された2本の竹筒（図1、①）と、それを止める土台となる竹筒（図1、②）、中央に切れ目の入った3本の竹の棒（図1、③）、そして音の出る竹筒を吊るす2本の竹のへら（図1、④）からなり、ボンド及び釘などを用いずにロタン（図1、⑤）と呼ばれる竹のひもで巻き、それぞれの部材を止め完成させる。

部品（図1）



完成品（図2）

音を出す竹筒はそれぞれ音程の調整がされており、竹の長さ・太さによって音程が異なる。竹筒が短くて細い“アンクルン”は音が高く、太く長くなるにしたがって低い音が出る楽器である。どの“アンクルン”も横に揺ることにより、音を出す竹筒の下部に残された2本の短い脚の部分が、土台の竹筒に彫ってある溝の両脇の壁にぶつかり、音が出る仕組みとなっている。なお、音を出す筒は素材が竹であるため、後から音程調整が可能となっている。銅と錫の合金で作られている“ハンドベル”では製造後の音程調整が全くできないのとは対照的である。

音程調整の仕方は、音を下げたい場合は切り込みの入っている竹筒の側面側を削り、音を上げたい場合には竹筒の上部を削り調整を行う。いずれの場合もチューナーなどを用い、削りすぎに注意を払いながら行わなければならない。

また、“アंकulun”には複数の音を出す竹筒を一つの枠の中に収め、その音を同時に鳴らすことのできる“和音アंकulun”もある。これは主に伴奏に用いられる。

3. 授業取り組み内容

1) 楽器制作

授業はまず楽器を組み立てるところからスタートする。

自ら組み立てることにより、楽器の音が鳴る仕組み、響の調整、ピッチを上・下させる方法など、楽器全体の仕組みを理解することを目的としている。

組み立てには、それぞれの部材をロタンできつく巻きながら止めて行くため、かなりの指先の力が必要となる。指導する筆者は、毎回指先の皮がむけてしまう程であるが、この締め付けが不十分であると、ボンド・釘など一切使わないで組み立てるため、すぐに緩んでしまい、その結果楽器が分解してしまうことにも繋がる。学生は苦勞して楽器を完成させることから、楽器に対し愛着が湧き、大切にしようとする気持ちが芽生えるようである。

2) 音出し

①組み立てが完了後、“アंकulun”の鳴らし方説明を行い、音階を演奏させる。

学生の持っている“アंकulun”は1音のみであるため、一人で鳴らしても楽しくも何ともないが、順番にド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ドを奏でさせると、学生の間からはどういふことが起きるか分かっているにも

かわらず、毎回歓喜の声が上がるほどである。

授業では8音の楽器を準備しているため、ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ドの音階を奏するには8種類の楽器と、それを鳴らす人が8人必要となる。それらの楽器はクラスの人数にもよるが、無作為に4～5セット配布している。そのため、学生は誰がどの音を持っているか分からない状態のままであり、その状態で音出しを行なうため、余計に不思議さが起こり、感動するのであろう。

②音階練習の熟達。

我々が日々目にする吹奏楽器・鍵盤楽器などは、その楽器単独でメロディーを奏でることが出来るが、“アンクルン”はある一音のみを奏でる楽器であり、太鼓などの打楽器と同じリズムを奏でる楽器となる。そのため、それぞれの人が与えられた音を、曲のメロディーにしたがって別々の人が次々と連続して奏でることでメロディーが完成される。かなり緊張感を伴った、スリリングな演奏形態となるのは必至である。そのため、集中力、協調性、反射神経等が養われ、教育的に大変優れた楽器であると言える。

③一通り音階練習が完成したところで、リズムをつけた音階練習を行う。

これで基本練習は終了となる。

3) ドレミの歌

ド・レ・ミの音階で歌いやすい、しかも誰もが親しみを持っているミュージカル「サウンド・オブ・ミュージック」から“ドレミの歌”の演奏を“アンクルン”で試みる。なお、学生に配布している“アンクルン”はド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ドの幹音のみであるため、曲中に出てくる派生音は幹音に置き換え演奏を行う。

①最初に階名唱を行い曲全体の流れを確認する。

誰もが知っている“ドレミの歌”の階名唱は、ド・レ・ミの感覚を養うのに最適であると判断し、最初に行う曲として取り入れた。それは筆者自身様々な場面での歌の指導を通して実感している。一例を挙げると、定年退職後の合唱経験の少ないメンバーが大半の男性コーラスグループの指導において、最初はなかなか音程が取れなかったメンバーに対し、毎回発声代わりに“ドレミの歌”を歌わせている。その練習の回を重ねて行くと、紙面ではお目にかけられないのが残念であるが、個人差はあるものの、実に見張らんばかりの成長をとげ、音程感覚が日増しに良くなって行く姿には毎回驚かされるのである。

本学の学生の中にも歌うことが苦手であり、音程感覚に劣等感を持っている学生が多くいるため、この練習は効果が上がっているようである。

②曲の流れが確認できたところで、階名唱しながらの“アンクルン”の演奏に入る。

最初は歌う、鳴らす、の二つの神経を同時に使うため、戸惑いが見られるが、回を重ねるごとに次第に慣れて行き、やがてはスムーズに演奏できるようになる。

③次に歌詞を歌いながらの演奏を行う。

階名唱では自分の鳴らす音の場所が判断できたが、歌詞で歌いながらの練習となると、また別の神経及び感覚を感じながらの演奏となるため、さらに戸惑いながらの演奏となる。しかし、若い人の問題解決能力には素晴らしいものがある。何でも吸収することの出来る年代であるからこそではあるが、回を重ねるごとに上達して行く姿には、毎回目を見張るものがある。改めてどのようなことを学生側に求めるかの、教師側の取り組みの重要性を痛感するところである。

④最後に、1回目階名唱、2回目歌詞で歌いながらの“アンクルン”の連続演奏を行なう。

4) 春の小川

続いて、文部省唱歌“春の小川”の演奏を行う。

手順は“ドレミの歌”と同じである。

- ①“春の小川”をピアノ伴奏で階名唱する。
- ②階名唱をしながらの“アンクルン”の演奏に入る。
- ③歌詞を歌いながらの“アンクルン”の演奏を行う。

この時“春の小川”を演奏してみて、初めて気づくことがある。それはこの曲にはファが登場してこないことであり、普段の歌唱練習ではファが無いことなど全く気づかないものである。そんな当たり前のようなことを新ためて気づかせてくれる楽器でもある。

④和音の学習を兼ね、ハンドサインによる合奏を行う。

ここで紹介するハンドサインは、十数年前ハンドベル世界大会のワークショップにおいて紹介されたものを“アンクルン”に応用したものである。

まず私が一本指を示す。これはⅠ度の和音を意味し、ド・ミ・ソを持っている学生が音を奏でる。次に4本指を示す。これはⅣ度の和音を意味し、ド・ファ・ラを持っている学生が音を奏でる。最後に5本指を示す。これはⅤ度の和音を意味し、ソ・シ・レを持っている学生が音を奏でる。そして私が順不同でハンドサインを出し、それに応じて学生はそれぞれそれに合った和音を奏でる練習を行う。これはカデンツの練習となり、さらには伴奏法入門の基礎知識とすることが出来る。

春の小川

I I I I IV I I
 ゐ ー ろ の お が わ は ろ ら ー ゐ ー ー
 5 I I I I IV I V I
 ゐ ー ー の ー ゐ ー ー ら ん ー ゐ ー ー
 9 V V IV IV IV IV V I
 ー ー ら ら ー ー ー ー ー ー ー ー ー
 13 I I I I IV I V I
 ゐ ー ー ー ゐ ー ー ー ー ー ー ー ー

⑤歌詞を歌いながら、筆者のハンドサインに従い和音を奏でる。

この取り組みでは、自らの歌声に、自ら伴奏を付けることとなる。非常に単純な取り組みではあるが、これを行なった際には皆一様に驚き、感動の声が上がるほどである。学生はこのことで、メロディーに対しどの和音が合っているかを耳を通して知るきっかけとなっているようである。

筆者は毎年本学が夏休みに開催している教員免許状更新講習において「ハンドベル体験講座」を行なっているが、その際にも幼稚園及び小・中学校の先生方向けに“アンクルン”を使用しての同様の指導を行なっている。そこにおいても、やはり学生と同じような驚きと感動の声が上がっており、“現場に帰ったらさっそくやってみます”という声が多く聞かれる。音楽はこんな単純な試みであっても人を感動させる魅力を持っていることの証明であろう。

5) 富士山

- ①この曲は、歌唱の基礎の教科書では# 2つの二長調で書かれている。そこで、まず移動ド唱法を行い、曲全体を把握する。
- ②一通りマスターしたところで、アンクルンの音階であるハ長調での移動ドによる階名唱を行う。
- ③次に“アンクルン”の演奏に入る。

以後の手順は“春の小川”と同じである。この曲はド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ドすべてが使われているため全員での合奏が可能となる。

6) グループ分け及び自由曲の選択

- ①グループ分けを行ない、グループによる“ドレミの歌”の演奏を行う。

グループ分けは、まず同じ音を持っている人どうしが集まり各自1から5の数字をもらう。次にそれぞれ同じ数字を持っている人どうしが集まると一つのグループでド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ドが完成する。クラスの数によってもグループ数は異なるが、おおよそ4～5グループできる。

グループが完成したところで、いままで全体で練習してきた“ドレミの歌”の演奏に入る。全員での演奏では同じ音を持っている人が何人もいたため、間違えてもさほど気にならなかったが、グループの演奏では音階の音がそれぞれ一人ずつとなるため、集中した緊張感いっぱいの気の抜けない演奏となる。

まずは階名で歌いながらの練習を行ない、次に歌詞を歌いながらの練習を行なう。

おおよそ“ドレミの歌”が完成したところで、“ドレミの歌”は課題曲とすることを伝える。

②自由曲の選定

その後、グループごとにド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ド全てが使用されている曲を選曲するよう伝え、同時に他のグループと曲が重ならないよう指示を行なう。これを自由曲とし、数週間後に発表会を行うため、習熟練習をするよう指導する。

自由曲選択の場面では、学生は普段曲を階名唱する習慣が無く、またド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ドが網羅されている曲を選曲しなければならないため、グループによってはかなり選曲に苦労する場面が見られる。しかし、音楽の得意な学生を中心にリーダーシップを取る学生が次第に現れ、話し合いが進み、比較的短時間に選曲を終えることができるのは、毎回驚きである。

そこで選曲される曲は「どんぐりころころ」「大きな栗の木の下で」「おつかいありさん」「聖しこの夜」などが多い。

③自由曲のアレンジ（ハーモニーを加味する）

課題曲、自由曲ともにメロディーをスムーズに奏でることができるようになったら、さらに課題を与える。それは“春の小川”“富士山”で行ったハンドサインによる和音を参考に、メロディーに和音を加えることである。各グループで話し合いを行いながら、メロディーに調和する音選びを行いながらより豊かな曲作りを行うよう指導する。

6) 発表会

以上の内容を5週連続で行い、翌週にグループごとに全員の前で取り組みの成果と感想を発表させる。

学生は発表会のために、自主的に空き時間を利用した練習を行なうようになる。

4. 学生の感想（発表会後の感想）

- グループでの練習が楽しかった
- みんなの顔を見ながらの練習は楽しかった
- 仲間と一緒に音楽を楽しむことを初めて知った（いつもは一人:ピアノ）
- 協力し合うことの大切さ、楽しさを知った
- 楽器を作る？え！何で、と最初は思ったが、演奏を行っていくうちに不思議と愛着が湧いてきた
- これ何！竹？一音しか鳴らせないの！何ができるの？ みんなで鳴らしたらおー！感動した
- 組み立てから始まることにより、愛着がわき、“アンクルン” に対しての意識が高まった
- 新鮮な気持ちで楽器を組み立てることができ、楽しかった
- 階名で歌った経験がないので勉強になった
- 階名で歌うことにより、音の感覚をつかめるようになった
- 和音が理解できるようになり、和音に対しての関心が高まった
- ハーモニーの大切さを知り、興味が持てるようになった
- 周りの音が聴けるようになった
- 変な和音に気づくようになった
- ハーモニーの合わせ方を考えられるようになった
- 和音を加える時の話し合いが楽しかった
- 和音の勉強を、子供の歌の伴奏に生かしたいと思った
- もっと和音の勉強をしようと思った
- 音の組み合わせで作る音楽の楽しさを知った
- 他のグループの刺激を受けながらの練習は楽しかった
- お互いに指摘しあい、助け合い、話し合いを行なったグループワークの有効性を知った
- 一人欠けても演奏ができない、また一人では何もできないことを学べ、

協力し合うことの大切さを知った。

- 自分の担当の音は自分しかいないんだと思い、音に対して責任を持てた
- 集中力、協調性が養われたと思う
- アレンジの仕方でもこんなにも曲の雰囲気が変わることを知った
- アレンジする力が向上した
- アレンジの楽しさ、難しさを知ることができた
- 次に出てくる音を予測できるようになった
- 他のグループと違うことをしたくなった
- 苦手とする人に対しアドバイスができるようになった
- 他のグループの発表を聞き、アレンジの仕方はたくさんあることを学んだ
- 一回一回の練習で上達してゆく喜びや達成感を得ることができた
- リズム感・演奏力が向上した
- 他人に任せず、自分の役割を果たすことを学べる楽器であった
- 自分の音程感覚がまだ足りないことがわかった
- うまく演奏できた時の達成感を味わうことが出来た
- グループ活動を通して、普段あまり会話していない人たちとも仲良くなれた
- リズム感や和音などの知識を知ることができた
- みんなで協力して曲を完成させる楽しさは、自分が想像していた以上であった。達成感もあった

5. 有用性

取り組み時の学生の反応及び感想などにより、学生に対しての有用性は次のようなことが挙げられる。

- ①自ら楽器を組み立てるため、楽器対し愛着がわき、大切にしようとする心が芽生える

- ②他の人の出している音を聞くようになる
- ③歌いながら曲を奏でるため、知らず知らずのうちに音程感覚が身につく
- ④リズム感覚が養われる
- ⑤和音の理解が計れる
- ⑥音楽を作る楽しさを知ることが出来る
- ⑦自分の音の順番を集中して待つようになる
- ⑧お互いに助けあいの精神が身につく（できない人への指導）
- ⑨向上心が芽生える
- ⑩グループ活動により、協調性が身につく
- ⑪達成感を味わえる

授業内調査によると、受講している約半数近くの学生は高校時代に芸術選択科目の音楽を選択しておらず、また聞くのは好きであるが、音楽をプレイすることに対し苦手意識を持っている学生も半数近く存在する。さらには“自分は音痴だ”と思い、歌うことを避けている学生も相当数いることが分かった。しかしながら、児童教育専攻の学生は小学校免許、幼稚園免許を取得しようとする学生が大半であり、必然的に音楽を指導する場面が否応無しにやってくる。そのような場面において音楽に対して苦手意識を持っていると、どうしてもそこから避けようとする意識が働くのが人間ではないだろうか。教育現場においてそのような意識が働く先生に指導を受ける生徒は、大変不幸である。

この“アンクルン”の取り組みに対して学生からは、「楽しくない」などの否定的な感想を述べた学生は無く、むしろ苦手意識を持っていた学生からは一様に「練習が楽しかった」と言う声が多く聞かれた。勿論感想にもあったように、当初「楽器を作るの、どうして」「ひとつの音しか出ない楽器で何ができるの」などの声があったのは確かではあるが、グループ活動などを通して次第に学生一人一人の意識に変化が見られるようになっていった。そういう意味では“アンクルン”の取り組みは、苦手意識を持っ

た学生に対しての何らかの有用性が見て取れるのではないだろうか。また、苦手意識を持っていない学生にも、苦手な学生に対して手を差し伸べ、一緒に向上しようとする意識が芽生え、共に音楽を楽しんでいる様子には感動するものがあった。

「好きこそ物の上手なれ」のことわざ通り、まず“音楽することは楽しい”と思う気持ちを持たせ、“向上心”を芽生えさせることが大切であることを、“アンクルン”の取り組みによって、あらためて思い知らされた。

6. 終わりに

“アンクルン”をはじめとするハンドベルと同種の楽器は、近年幼稚園・小学校などで多く見られるようになった“ミュージックチャイム”、棒状の“チャイム”など、比較的安価で容易に手に入れることができる楽器がある。それらの楽器の共通点は“アンクルン”と同じ取り組みを行うことができることにある。

中央教育審議会答申（平成27年12月21日）及び新学習指導要領では、アクティブラーニングの視点からの授業改善が求められている。すなわち問題解決学習、発見学習、体験学習、グループ・ディスカッション、グループワークなどを授業内容に含めること、が明記されている。そうした中においても“アンクルン”をはじめとするハンドベルと同種の楽器は大きな力を発揮することができるのではないだろうか。今後さらに教育現場において広まっていくことを期待したい。

【引用・参考文献】

- ・荒井弘高、中尾かつ江、三沢大樹著『歌唱の基礎』圭文社（2013.3）
- ・文部科学省『新学習指導要領』（2017.3公示）
- ・中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」（2015.12）

【楽器輸入・資料提供】

インドネシア楽器協会